

ヤスミン・ワールドの作られ方

『タレントタイム』を織りなす才能・時・物語

山本 博之

2017年3月のシアター・イメージフォーラム(東京・渋谷)に始まり、2017年から2018年にかけて日本の全国各地で『タレントタイム』¹⁾(ヤスミン・アフマド監督、2009年)の劇場公開が行われた。アジアフォーカス・福岡国際映画祭をはじめとする映画祭や特集上映、そしてマレーシア映画文化研究会／混成アジア映画研究会による自主上映を含め、日本でも毎年どこかで『タレントタイム』が上映されてきたとはいえ、制作とマレーシアでの公開から8年を経ての日本での一般劇場公開には「時間がかかった」という感想もあるだろう。しかし、8年前にこの作品が劇場公開されていた場合に、今回見られたような大きな反響があったかはやや疑わしい。この8年間の間に、日本におけるアジアの社会や映画に対する関心やリテラシーが高まってきたことが『タレントタイム』の高評価の背景の1つにあるのではないだろうか。配給元のムヴィオラおよび各地の上映劇場に感謝するとともに、これまでさまざまな形でアジア映画の公開をサポートして愉しさを紹介してきた方々にも感謝の意を表したい。

『タレントタイム』を自主上映してきた立場の印象として、観客に物語がわかりにくいという感想を抱く人たちがいることも否定できない。登場人物の善人と悪人がはっきりしていないことや、少年と少女の恋愛の話かと思ったら最後は少年どうしの話になってしまい、途中まで本筋だと思っていた恋愛の話がどうなったのかわからないままになったという感想を聞くこともある。善悪を明確にしてハッピーエンドかそうでないかをわかりやすく描く映画と比べると、『タレントタイム』は、物語の筋を追うだけでなく画面で描かれていない部分にどのように想像を巡らせるかによって受ける印象が大きく異なる作品である。むしろ、観客にそれぞれの解釈を許す物語の「余白」の大きさに『タレントタイム』の魅力があると言える。それはヤスミン監督の作風から来ているとともに、マレーシアでの映



像の制作・公開に関わる制約によるところもある。

多宗教・多言語の民族混成社会であるマレーシアは、多様な考えを持った人々が隣どうして暮らすなかで、ときに諍いを起こすことがあっても、諍いが奪い合いや殺し合いに発展しないような工夫を積み重ねてきた。手放しの自由を認め合うのではなく互いに箍を嵌め合うこともそのような工夫の1つである。ただし、この考え方は、人々の行動や表現に対する行き過ぎた規制に容易に繋がりをうる。ヤスミン監督はそのような規制を嫌い、だからといって全面的に対決するのではなく、物語にいろいろな意味を織り込んで、誰にでも伝わる物語とわかる人にだけ伝わればよい物語を重ねて1つの物語に織りなす方法をとった。

だからこそ『タレントタイム』は、マレーシアで作られてマレーシア社会の様子を背景にした物語でありながら、マレーシアの社会や文化についての基礎知識がなくても物語を十分に理解して愉しむことができ、その上で、マレーシアの社会や文化、そして規制を含むマレーシアの映画制作状況について理解を深めることで物語をさらに深く愉しめるようになっている。

ヤスミン監督は1958年、マレーシア南部のジョホール州ムアールで生まれた。高校まで地元で学んだ後、イギリスで心理学を学び、帰国後に広告代理店に勤めた。国営石油会社ペトロナスをはじめとするマレーシアの企業が祝祭日ごとにテレビで放映する広告の制作などでマレーシアの人々に知られるようになった。2003年にテレビ用ドラマとして長編の『ラブン』を制作して以来、『細い目』、『グブラ』、『ムクシン』、『ムアラフ』、そして『タレントタイム』と毎年1作のペースで長編映画を制作し、『ラブン』を含めて6作の長編映画を撮った。2009年3月に『タレントタイム』がマレーシ

1) 2017年の劇場公開時の邦題は『タレントタイム～優しい歌』。

アで公開された4か月後の7月25日、ヤスミン監督は脳出血のため51歳で亡くなった。

ヤスミン監督は亡くなったときも次の作品を準備しており、その1つは日本を舞台にした『ワスレナグサ』だった²⁾。ヤスミン監督の母方の祖母は日本で生まれ育った日本人で、マレーシア(当時はマラヤ)に渡って築いた家族の孫の1人がヤスミン監督だった。『ワスレナグサ』では、自分の余命が短いと知ったおばあちゃんが、かつて自分がマレーシアに来たときに別れたきりの男の子に当時の思い出の品を返すために娘のイノムに思い出の品を託して日本に行かせるという話で、石川県金沢での撮影がほぼ決まっていた³⁾。

このノートでは、マレーシア社会について要点を整理してから、Talentimeにちなんで才能(Talent)と時(Time)の2つの側面からヤスミン・ワールドの作られ方を紹介して、その上で『タレントタイム』の物語(Tale)について考えてみたい⁴⁾。ヤスミン監督の作品は、『細い目』、『グブラ』、『ムクシン』のように物語上の直接の繋がりがあある作品に加えて、それらと登場人物の設定は重なっているが物語上の直接の繋がりは描かれていない『ラブン』、そして登場人物の設定は異なるが作品世界に共通性が見られる『タレントタイム』や『ムアラフ』があり、これらが全体で「ヤスミン・ワールド」と呼ばれる作品世界を成している⁵⁾。以下では主に『タ

レントタイム』を取り上げるが、必要に応じてヤスミン・ワールドの他の作品にも言及している。また、解釈の幅を広げるため、あえて筆者の想像を逞しくしている部分があることをお断りしておく。

1. 混成社会マレーシア

はじめに、『タレントタイム』の舞台であるマレーシアについて、『タレントタイム』の物語をより深く理解するために知っておくとよい基本的なことがらを紹介しておきたい。

マレーシアは民族・宗教・言語の混成社会である。マレーシアの国民は主にマレー人、華人(中国系)⁶⁾、インド人の三民族から成る⁷⁾。民族の別は宗教・言語の別とほぼ重なっており、マレー人は全てイスラム教徒で母語はマレー語、華人は非イスラム教徒(その多くは仏教徒)で母語は中国系諸語(福建語や広東語など)、インド人は非イスラム教徒(その多くはヒンドゥ教徒)で母語はインド系諸語(その多くはタミル語)である。

宗教が基本的に「マレー人＝イスラム教徒、非マレー人＝非イスラム教徒」であるのでわかりやすいのに対し、言語はやや複雑になっている。まず、民族ごとに民族語がある。そして、中学以上の公立学校では授業が国語(マレー語)で行われるため、マレーシア人は程度の差はあっても誰でもマレー語を話すことができる。さらに、家庭内で主に英語を使う家庭もある。このためマレーシアでは1人が2つも3つも言葉を話せるのはごく当たり前だし、会話の途中でマレー語か

2) このとき準備していたもう1つの作品は『Go, Thaddeus!』だった。2007年の東南アジア競技会への出場を夢見るシンガポールの17歳のトライアスロン選手タディウス・チョンが、出場資格獲得のためのタイムトライアルでゴールした直後に死亡し、その3か月後におばのBelinda Weeがタディウスの実話をもとに『Running the full distance: Thaddeus Cheong』を出版した。ヤスミン監督は遺族からタディウスの物語の映画化を打診され、2010年8月の青年オリンピック大会にあわせた劇場公開を目指して準備を進めていた。

3) 『ワスレナグサ』についてはブックレット②所収の「『ワスレナグサ』からひろがるアジア映画人のつながり」も参照。

4) このノートは『タレントタイム』の劇場公開にあわせて行ったトークショーなどの準備のためのノートを再構成したものである。マレーシア映画文化研究会作成のマレーシア映画ブックレット『ヤスミン・アフマドの世界① タレントタイム』および混成アジア映画研究会作成の研究資料『月と野いちご ヤスミン・アフマド監督『タレントタイム』研究基礎資料』と一部で内容が重複するところがある。なお、このノートで「ブックレット」とは3冊のマレーシア映画ブックレット(①タレントタイム、②細い目、グブラ、ムクシン、③ムアラフ、ラブン)を指す。

5) 『チョコレート』などの短編作品やベトロナスなどのテレビ広告もヤスミン・ワールドに含まれる。また、ヤスミン監督の作品ではないためにヤスミン・ワールドに含めてよいかは議論が分かれるだろうが、ヤスミン監督の盟友ホー・ユーハン監督の『ミン』(Min)は、主人公がミン(ヤスミン)で、ヤスミン監督の両親がミンの両親役で出演しており、ヤスミン・ワールドと密接に関わっている(ヤスミン監督はヤスミンの同僚役で出演している)。「ミン」についてはブックレット③所収の「繭に包まれた静けさが破れるとき」および「蝶を探すユーハン、水を飲むミン」を参照。

6) 中国(大陸中国と台湾を含む)以外の地域に住む中華系住民を日本語で広く「華僑」と呼ぶが、「僑」には「仮住まい」という意味があり、「華僑」は「いずれ中国に帰る人」あるいは「本来は中国に帰るべき人」という意味を持つ。マレーシアの中華系住民には、何世代も前に中国からマレーシア(マラヤ)に渡ってきて、マレーシアを祖国だと思って祖国の発展のために尽くし、マレーシアの国籍をもってマレーシア人として暮らしている人たちがたくさんいる。これを「華僑」と呼ぶことは、これらの人々を正真正銘のマレーシア国民だと認めず、「いずれ中国に帰る人」、「本来は中国に帰るべき人」と見なすことになる。マレーシアの中華系住民は自分たちを「華人」と呼んでいる(「中華系」は「中国系」とほぼ同じ意味だが、「中国系」とすると「国」のイメージが強くなるため、それを避けて「中華系」を好む人もいる)。

7) マレーシアの国民を「三民族」とする見方は、出生証明書や入学書類や身分証明書などの公的な書類で民族を「マレー人、華人、インド人、その他」の選択肢から選ばせることになる。これは自分たちを「その他」扱いして固有の民族名を認めない差別的な態度だという批判が先住民から出されている。ただし、先住民の多くがボルネオ島に住み、『タレントタイム』に先住民は明示的に出てこないことから、このノートでは説明を複雑にしないために「三民族」という言い方を受け入れている。

ら英語へ、英語からタミル語へと言葉を切り替えることもよく見られる。

『タレントタイム』の登場人物で言えば、ハフィズはマレー人のイスラム教徒で、マレー語と英語を話す⁸⁾。ハフィズのライバルのカーホウは華人で、おそらく仏教徒⁹⁾で、広東語と華語と英語とマレー語を話す¹⁰⁾。メルーはマレー人のイスラム教徒で、マレー語と英語を話す。メルーを送り迎えるマヘシュはインド系のヒンドゥ教徒で、彼自身は言葉を話さないが、姉のバヴァーニは英語とタミル語とマレー語を話す¹¹⁾。

この基本的なことを押さえた上で、さらに次の2つのことを知っておくと『タレントタイム』の物語がより理解できる。

1つめは「ブミプトラ」と「非ブミプトラ」の区別である。「ブミプトラ」とはサンスクリット語の「土地の子」という意味の言葉に由来する。海のシルクロードにあって昔から世界各地のさまざまな人びとが訪れていたマレーシアでは、突き詰めて言えばほぼすべての人が移民の子孫だとも言えるが、祖先がマレーシアに渡って来た時期の違いやそれと国の独立の時期との関係などから、マレー人と先住民をブミプトラ、華人とインド人を非ブミプトラと呼んで区別している¹²⁾。

ブミプトラは大学進学や海外留学の奨学金の割り当てや公務員の採用などで優遇されることが法律で決まっているため、華人とインド人はマレー人と比べてはるかに狭い門を勝ち抜かなければならない。大学進学の選抜は全国統一の高校卒業資格試験の点数で決まり、全国試験なので受験者数が多くてわずか1点

差でも順位が大きく開くため、華人やインド人の家庭では子どもの成績を1点でも上げるために必死になる。『タレントタイム』でカーホウの父がカーホウに厳しいのは、父から見れば子どもの将来を思って憎まれ役になっているところがある。

強調しておきたいのは、ここでいう華人やインド人とは中国やインドで生まれ育って最近になってマレーシアにきた外国人ではないということだ。祖先がマレーシアに来て何世代も経っており、自分もマレーシアで生まれ育ってマレーシアの国籍を持ち、マレーシアを祖国とする人たちである。それなのにいまだに移民の子孫とみなされて国民としての権利が制限されていることについては賛否を含めていろいろな考え方がありうるが、ここではその是非には立ち入らない。

『タレントタイム』の物語を理解するために知っておくとよいもう1つのことはマレーシアにおける宗教の意味である。宗教は信仰に関わることであり、冠婚葬祭のやり方に関することでもある。やや大雑把な言い方をすると、マレーシアでは宗教が違う人とは冠婚葬祭を一緒に行えず、その制限はイスラム教と非イスラム教の間で特に顕著である。

例えば、マレーシアではイスラム教徒と非イスラム教徒は結婚できない。また、マレーシアではイスラム教徒が別の宗教に改宗することは認められていない。したがってイスラム教徒と非イスラム教徒が結婚するためには、どちらが男でどちらが女であるかによらず、非イスラム教徒がイスラム教に改宗することになる。

非イスラム教徒の華人やインド人がマレー人と結婚するためにイスラム教に改宗した場合、例えば両親の葬式や墓参りができないことになる。実家の墓参りぐらいでもいいだろうとか、本人の心の持ちようだろうとか思う人がいるかもしれないが、結婚すると夫婦間だけでなく家族や親戚との付き合いも出てくるため、夫婦間ではよいと思っても難しいことがあるのも現実だ。『タレントタイム』でイスラム教徒と結婚したら「向こう側に行ってしまう」とマヘシュの母が言ったのはこのことを指している。それを聞いたバヴァーニがそんなことはないかと反論すると、母は「子どもにはわかるまい」と返す。これまで「向こう側に行ってしまう」例をたくさん見てきた母の言葉の重みと、自分たちはそんなことを気にしないという若いバヴァーニの世代による捉え方の違いがよく表れている。

8) 母との会話でマレー語と英語を混ぜて話していることから、日常的にマレー語と英語を話す環境で育ったものと想像される。

9) カーホウの宗教は劇中では明示されていない。非マレー人は非イスラム教徒であるというマレーシアの常識に照らせば非イスラム教徒で、それがキリスト教か仏教かは物語上あまり重要でないということで劇中では示されない。マレーシア事情に照らして、統計的に見れば仏教徒である可能性が高く、次に可能性があるのはキリスト教徒である。

10) カーホウはハフィズとはマレー語と英語で話し、親友のメルキンとは華語(マンダリン)で話し、タン先生とは広東語で話す。おそらく家庭で広東語と英語を使い、小学校でマンダリンを学び、中学校以降でマレー語を学んだものと想像される。

11) バヴァーニは英語を中心にタミル語とマレー語を混ぜて話す。マヘシュの母はタミル語を中心に英語とマレー語を話すため、バヴァーニと母の間では2人が違う言葉を話したまま会話が続く。母の世代はマレー語の普及率が低いのにに対して子どもたちの世代では学校教育を通じてマレー語が普及し、かわりにタミル語を使う機会が減っているという世代の変化を反映している。

12) 「非ブミプトラ」はかつての移民の子孫という意味で「移民系」とも呼ばれてきたが、国民になって何世代も経つのに移民と呼ぶのは差別的だという考え方もあり、最近では「移民系」という表現を使わない傾向がある。

2. 才能 TALENT

演技でなく個性と経験

『タレントタイム』にはヤスミン・ワールドの常連を含む多くの役者が出演しているが、専業の役者はほとんどいない。大人の出演者で本業が役者なのは、マヘシュの母親役のスカーニア・ヴェヌゴパル¹³⁾と車椅子の男の役のジット・ムラド¹⁴⁾の2人が舞台、ハフィズの母親役のアゼアン・イルダワティ¹⁵⁾とメルーの母親役のミスリナ¹⁶⁾とカルソム夫人役のアイダ・ネリナ¹⁷⁾の3人が映画を中心とする役者で、その5人だけだ。メルーの父親役のハリス・イスカンダル¹⁸⁾はスタンダップ・コメディアン、アディバ先生役のアディバ・ノール¹⁹⁾とマヘシュの姉バヴァーニ役のジャクリン・ヴィクター²⁰⁾は歌手で、舞台に立つ仕事が本業だと言えるが、それ以外は人前で舞台に立つことを本業としない人ばかりだ。

メイドのメイリン役のタン・メイリン²¹⁾の本業は音楽教室のピアノの先生、アントニー校長先生役のアントニー・サヴァリムトゥ²²⁾と医者役のハフィズ・イブラヒム²³⁾とカーホウの父親役のデビッド・ロック²⁴⁾はヤ

スミン監督の元同僚で広告業界の関係者だ²⁵⁾。アヌアル先生役のモハメド・アヌアル²⁶⁾とタン先生役のタン・ユーリオン²⁷⁾、そして大人ではないがハムレットの「生きるべきか死ぬべきか」のセリフで予選落ちした男子生徒役のハリス・ザカリア²⁸⁾は、広い意味でヤスミン監督の家族である²⁹⁾。

これらの役者と同僚と家族で支えつつヤスミン監督が舞台に上げて高校生役を演じさせたのは、ごくわずかを除き、ほとんど演技経験がない「素人役者」だった。現在も演技を仕事にしているのはハフィズ役のシャフィー・ナスウィップ³⁰⁾とカーホウ役のホン・カーホウ³¹⁾の2人だけだ。メルーの妹マワール役のエルザ・イルダリナ³²⁾が映像制作、カーホウの親友メルキン役のメルキン・チー³³⁾がショービジネスに関わる仕事をしているが、マヘシュ役のマヘシュ³⁴⁾とマヘシュの同居人ヴィマラ役のシェリナ・クリシュナン³⁵⁾は映像や

13) Sukania Venugopal. 母はマレーシアのラジオ・テレビに初めて登場したインド系マレーシア人の女性歌手 Nalini Venugopal。

14) Jit Murad. 『細い目』と『グブラ』のオーキッド役のシャリファ・アマニがヤスミン監督と初めて会ったときに同席していた。

15) Azean Irdawaty Yusof. 後述。

16) Misliana Mustaffa. ヤスミン作品では『ムクシン』にセナ役で出演。

17) Ida Nerina Hussain. ヤスミン作品では『細い目』と『グブラ』にオーキッドの母親役で出演。

18) Harith Iskandar Musa. ヤスミン作品では『細い目』と『グブラ』にオーキッドの父親役で出演。

19) Adibah Noor Mohd Omar. 『細い目』、『グブラ』、『ムクシン』にメイドのヤム役で出演。『タレントタイム』では校長役だという誤解が多いが、校長は気が弱いインド系男性のアントニー先生で、アディバ先生は校長ではない。アディバ先生の設定上の担当科目ははっきりしない。アディバ・ノールが実生活で高校の英語教師だった経験があることから英語の先生である可能性が高いが、アディバ・ノールの現在の本業が歌手なので音楽の先生かもしれない。

20) Jaclyn Victor. 2004年に行われたオーディション番組『マレーシアン・アイドル』で優勝。

21) Tan Mei Ling. 『細い目』と『グブラ』にジェイソンの母親役(仏教徒)で出演、『ムアラフ』にブライアンの母親役(キリスト教徒)で出演。『タレントタイム』ではイスラム教徒の役を演じ、タン・メイリンはヤスミン作品で最も多くの宗教の信徒役を演じた。

22) Anthony Michael Savarimuthu. 『ムアラフ』に気弱な校長先生の役で出演。

23) Hafiz Ibrahim. 『ラブン』にオーキッドの恋人役で出演。ヤスミン監督と同じ広告代理店でヤスミン監督のアシスタントを務めた。2012年の断食明けのテレビ広告『The Journey』をもとに、2016年にヤスミン監督に捧げる長編ドラマ『ひたむきに生きる』(Tulus Ikhlās)を監督。

24) David Lok Weng Sung. 『細い目』にジミー役で出演。『ムアラフ』にブライアンの父親役で出演。ヤスミン・ワールドの常連の悪役。本業はカメラマンで、ヤスミン作品のポスター写真の多くを手掛けた。

25) 役名はないがタレントタイムの舞台で踊るインド人少女を演じたアニシャ・カウル (Anisya Kaur) の父も広告業界である。

26) Mohd Anuar Mohamed Zakri. 『グブラ』にアヌアル役、『ムクシン』にサリブ役で出演。実生活ではヤスミン監督の運転手。

27) Tan Yew Leong. 『ムクシン』にバスの車掌とサッカーの審判役で出演。実生活ではヤスミン監督の夫。

28) Haris Zakaria. 『ムアラフ』で野外に裸で置き去りにされた少年時代のブライアン役で出演。ヤスミン監督の甥(ヤスミン監督の妹オーキッドの息子)。

29) 『タレントタイム』の劇中、アヌアル先生が運転する車で、タン先生が助手席に乗って、後部座席にメルーが座っている。メルーはマレー語でジャスミン、つまりヤスミンの分身なので、アヌアルが運転して、助手席に夫のユーリオンが座って、後ろに自分が座っているというヤスミンの家族の楽しい時間をフィルムにおさめた場面になっている。

30) Mohamad Syafie Naswip. 『ムクシン』にムクシン役で出演。『ソナラップ』(原題 Songlap, エフエンディ・マズラン、ファリザ・アズリナ・イサーク監督、2011年)などに出演。

31) Howard Hon Kahoe. アメリカで映画制作を学び、現在は俳優だけでなく監督もつとめる。2017年に東京国際映画祭で上映された『アケラット——ロヒンギヤの祈り』(原題 Aquerat (We the Dead)、エドモンド・ヨウ監督、2017年)などに出演。オンライン公開されている短編『讓我愛你好嗎』(英語題: The Happy Ending)では濃厚なキスシーンを披露した。

32) Elza Irdalynna Kahiril Anwar. マレーシア・アメリカ合作のアニメ映画『カエルのリビットめざせ! プリンセスの国』(原題 Ribbit, 2014年、チャック・パワーズ監督)のラファ役の吹き替えなどを経て、映像制作ユニット Cupid Crew を結成。母アゼアン・イルダワティと父ハイリル・アンワルの出会いを描いた短編『Love at First Sound』(2016年)では脚本、撮影、挿入歌の作詞を担当。

33) Melkinn Chee Ka Sheng. 兄弟姉妹4人とともに奇術団 MRGJC Quest Academy を結成。組織名は5人の名前の頭文字を繋げて「マジック」と読ませる。

34) Mahesh Jugal Kishor. 大学で観光業を学び、現在は中東某国のホテルに勤務。

35) Sherrina Krishnan. 動物保護のNGOを設立。

演技とは直接関係ない仕事をしており、メルー役のパメラ・チョン³⁶⁾とメルーの妹ムラティ役のアメリア・ヘンダーソン³⁷⁾とメルーの祖母役のスーザン・チョン³⁸⁾も演技とは関係ない道に進んでいる。

物語の中心となる役割に素人同然の高校生たちを使ったのは、ヤスミン監督が自分のことを監督 (director) ではなくストーリーテラー (storyteller) と呼んでいたことと関係している。映画撮影を専門に教える学校で学んだわけではないヤスミン監督の作品を見て、固定カメラで撮りすぎているとか人物のクローズアップが少ないとか言って撮影技術は素人同然だと批判する人たちがいたとき、ヤスミン監督は、自分の役割は撮影技術で見せることでも役者に演技させることでもなく、すでにある物語を取り出して人々に示すことで、だから自分は監督ではなくストーリーテラーなのだと応じた。撮影の技術や理論は技術や理論のためにあるのではなく、どのような物語を示すのが一番大切なのだということを、そう言わずに伝えている。また、ヤスミン監督は別のときにどうすれば心を打つ映画を作れるのかという質問に答えて、心を打つ物語は頭で考えて作るものではなく一人ひとりの中にあって、自分がしたのは相手の話をよく聞いて物語を引き出すことで、それ以外に何も特別なことはしていないと答えている。

演じない現場作り

素人同然の役者たちに演技だと意識させずに演技させるため、ときには役者を騙してでも、その人の本性が出て自然に振舞うような環境作りに心を砕き、演じない現場作りをしていた。

工夫の1つは役者に自分のふだんの言葉で話させることだった。ヤスミン監督はユーリョンと2人でバリーに籠って何度も推敲を重ねて脚本を練ってから、役者を交えて数週間のリハーサルを行った。脚本は基本的に英語で書かれており、一部のセリフがマレー語で書かれている。リハーサルでは脚本をもとに役者が場面ごとの自分の心情を理解し、セリフを自分のふだんの言い方に直していく。英語のセリフを福建語やマレー語に書き換えたり、自分の口癖が出るように直し

たりする³⁹⁾。

セリフだけでなく、ちょっとした仕草ややり取りでも役者の地が出てくるようにしていた。リハーサルを念入りにした上で、いったん本番のカメラがまわったらたとえ脚本やリハーサルと違うことになってもカットの声がかかるまではそれぞれの役になりきって行動し続けるというのがヤスミン監督の現場のルールで、ときにはずっとカットの声をかけずに役者たちにアドリブで行動させて、出てきた苦し紛れの動きを採用することもよくあった⁴⁰⁾。ふだんの態度が自然に出ているのを好んだため、セリフの途中で咳き込んだり他のセリフとかぶさったりしても撮り直さないこともあった。

ときには役者を「騙す」こともあった⁴¹⁾。『タレントイム』で、試験で学年1位を取れなかったカーホウが父親の車に乗る場面がある。カーホウ役を演じたホン・カーホウはこれが初めての映画出演で、ほかのキャストやスタッフをほとんど知らなかった。それをよいことに、ヤスミン監督はリハーサル期間を通してカーホウを父親役のデビッドと会わせず、デビッドはとても怒りっぽく、一緒に演じる人がミスをすると激怒して手が付けられないほどになると言ってカーホウを脅かしていた。撮影当日、今日のデビッドは特に機嫌が悪いようだから気を付けるようにと念を押して脅か

39) 例えば、『細い目』でジェイソン役を演じたシ・チューセンには「ノー」と言ってから話し始める癖があり、『細い目』のジェイソンも「ノー」と言ってから話す場面がいくつかある。

40) 『細い目』でジェイソンがCD売りの事務所でテレビ画面の音楽にあわせて踊り出す場面がある。ヤスミン監督はリハーサルでジェイソン役のチューセンにギターの弾き真似を1、2秒もすればいいからと言っておき、実際の撮影になると全くカットをかけなかった。困ったチューセンは音楽に合わせて即興の奇妙な踊りをし続け、そのまま採用された。同じく『細い目』で、ジェイソンが街でばったり出会ったマギーに最近連絡がない理由を問いただされる場面がある。チューセンはマギーが最近連絡がない理由をジェイソンに尋ねることを事前に知らされておらず、その場で必死に考えて答えたため、傍目からは筋が通らない答えをあたふたしながら答えている。

41) 『細い目』で、オーキッドがジェイソンとの関係をからかった長身の男子高校生に食って掛かる場面でも、ヤスミン監督はリハーサル期間中にオーキッド役のシャリファ・アマニを男子高校生役のミラー・アリ (Miller Ali) と一切会わせず、ミラー・アリは白人の血を引いているのでアジア人風のシャリファ・アマニたちを見下しているなどと嘘を吹き込み、シャリファ・アマニがミラー・アリをすっかり嫌ったところで撮影に入り、カットの声がかかるまで好きなように罵倒し続けるようにとだけ指示されていたシャリファ・アマニが本心から罵倒し続け、ヤスミン監督はとても気に入ってオーケーを出した。ミラー・アリはペトロナス社の2003年のテレビ広告「パラムの自転車」 (Param's bicycle, <http://goo.gl/GqOURf>) でヤスミン監督と一緒に仕事をし、『細い目』の後でインドネシアに行き、現在はインドネシアのテレビドラマや映画で活躍している。

36) Pamela Chong Ven Teen。政府観光局のプロモーションビデオなどに何度か出演していたが、現在は結婚して家族とオーストラリアで暮らす。

37) Amelia Thripura Henderson。マレーシアの王族と結婚。

38) Susan Ann Chong。メルー役のパメラ・チョンの母親。1954年、イギリスのエセックス生まれ。夫は中華系マレーシア人の建築家。

Mah: Hey, lu jangan nak jadi bodoh. Lu punya anak mati sudah takdir. (then to Orked, gentler) Lu jangan dengar cakap ah pek tua gila tu. Suddenly, Mah turns to Alan and gives him a look-over. Alan smiles at her. She grimaces. Mah: Bau apa busuk sangat ni? (turns to Pah accusingly) Lu kentut lagi eh, China-gek sial? Pah: (in Cantonese) Your head ah!	グブラ脚本 ←マレー語を自分の言葉 違いに直す
4. Ext. Same time. Brian's car. Brian tries to open his car door, struggling with the key as he tries to talk with his mother at the same time. Brian: Yes, I'm still here. I'm still here! Ma, I have to drive to work now. 5. Int. Same time. Ma's bedroom. Ma lets out a sigh. Ma: (Hokkien) Ok. Ok! Call me tonight. And don't forget, because I'll be waiting.	ムアラフ脚本 ←セリフを追加 ←英語を福建語に 書き換え

図 脚本の変更の一例(上:グブラ脚本/下:ムアラフ脚本)
(タン・メイリン提供)

してからカーホウが車に乗り込む場面を撮影した⁴²⁾。

3. 時 TIME

輝きたくなかない／決めるのはあなたじゃない

「時」と言ってもここでは過去から未来へとずっと流れていく時間のことでなく、全てのものとには始まりと終わりがあるという意味での時で、それは月に満ち欠けがあることと重なる。『タレンタイム』では月が重要な役割を演じている。メルーがタレンタイムの決勝に出たくないと言うと、メルーと口喧嘩ばかりしていた妹のマワールがメルーの背中を押すようにして舞台に立たせる。メルーが「輝きたくない」と言うとマワールは「決めるのは自分じゃない」と言い、空には満月が輝いている。

太陽が自分から光を発しているのと違い、月は自分では輝かず、太陽の光を受けてはじめて光り輝く。私たち一人ひとり月と同じで、ふだん自分で光り輝く

ことはないかもしれないけれど、ときが巡ってまわりの人が自分に光を当ててくれたら準備不足だとか輝きたくないとか言わずに人生の舞台に立って精いっぱい輝きなさいというヤスミン監督のメッセージが感じられる⁴³⁾。

星は砕け散り 消えゆく運命だと

『タレンタイム』は結果としてヤスミン監督の最後の長編作品となったが、それを別にしても「終わりの時」のイメージが幾重にも重なって出てくる作品になっている。

ハフィズの母エンブンは脳腫瘍で闘病の末に天に召される。エンブンを演じたアゼアン・イルダワティは1970年代から90年代にかけてマレーシア映画界で一世を風靡した大女優だが、乳癌を患い、治療費が高額であるため、子どもたちの将来を考えて治療を打ち切ろうとしていた。それを知ったヤスミン監督はアゼアンに『タレンタイム』の出演を依頼し、撮影までにアゼアンの病状が進んで立って演技できなくなると脚本を書き換えて車椅子に座ったままの役にし、さらに病状が進むとベッドに寝たままの役書き換え、エン

42) カーホウが乗った車が走り去った後、それを見届けるような人影が見える。焦点があっていないので誰かはわからないが、ブルーのシャツを着ていることとカーホウを見ていたことから考えると、タン先生がカーホウのことを見守っていたのかもしれない。

43) 詳しくはブックレット①所収の「『月の光』、そして『もう一つのマレーシア』」を参照。



エンブンを演じたアゼアン・イルダワティ



オーキッドが力強く、ジェイソンがなよとしたポーズ

ブンの役が作られた⁴⁴⁾。

ハフィズ役のシャフィー・ナスウィップは映画出演が2作目の若い役者で、病床で寝たきりと言っても大女優であるアゼアンと共演したら演技力の差が大きすぎて絵にならないのではないかと心配する声もあったが、ふたを開けてみると堂々とした演技でみごとに母と息子を演じた。

『タレントタイム』の出演を終えたアゼアンは出演料が想像以上の高額だったことに驚くとともに、自分は今もう映画に出演することはないだろうけれど『タレントタイム』が自分の最後の出演作品になったことを誇らしく思うと語った⁴⁵⁾。

劇中でメルーがタレントタイム決勝のために練習していた歌は「エンジェル」で、直接的には恋人どうしの関係を歌った歌だが、恋人どうしの歌にしてはやや縁起が悪いとも言える「星は砕け散り 消えゆく運命だと 粉みじんに砕け やがて消えるの」という一節が入っている。メルーはこの歌を英語で歌っているため、「星」は夜空の星であるとともに映画スターという意味も持つ。映画スターが消えゆく運命にあるという歌詞は、アゼアンが映画界で長く活躍してきたことに感謝しつつ女優として送り出すという意味を帯びて聞こえてくる。

この歌を歌う決勝の舞台に上りたくないと言うメルーの背中を押して舞台に上げたのは妹のマワールだった。マワールを演じたエルザ・イルダリナはアゼアンの実の娘で、あえて物語と役者を交差させてみるならば、これが母の女優としての最後の花道を飾る作品になることを理解した上で、その花道をしっかり飾ってほしいという思いを込めてメルーを舞台に押し上げたマワールがどのような気持ちだったか考えずにいられない。

44) 詳しくはブックレット①所収の「死による再生」を参照。

45) アゼアンは闘病の末に2013年12月に亡くなった。

4. 物語

TALE

「もう1つのマレーシア」

ヤスミン作品がマレーシアで公開されたとき、一部の保守的な批評家たちは、そこに描かれているのは「現実のマレーシアではない」と批判した。ただし、それはヤスミン監督が意図的に仕掛けたものだった。

『細い目』は、ムスリムのマレー人少女オーキッドと仏教徒の華人少年ジェイソンの民族と宗教の違いを越えた恋愛物語である。最初のデートで2人は写真館に行って記念写真を何枚か撮る。そのうち1枚ではオーキッドが力強いポーズをとり、その前でジェイソンがなよとしたポーズをとっている。マレーシアの一般的な認識では男の子は力強くて相手を守り、女の子はか弱く守られる立場だが、ヤスミン監督はそれをあえて逆転させた絵を見せている。マレーシアの常識に慣れ親しんだ目で見ると一瞬変な感じがするかもしれないが、2人が仲良さそうに写真を撮っている様子を見ているうちに、それもよいのかなと思うかもしれない。今は存在しない「もう1つのマレーシア」を描くことで、常識を疑ったことがなかった人たちに「もう1つのマレーシア」があっても悪くはないと思わせる契機になるかもしれない。

また、『細い目』にはオーキッドの母とそのメイドのヤムが居間でテレビを見ながら夕食の支度をしている場面がある。画面には2人の女性が映っており、1人がソファに座ってテレビを見ながら大笑いしており、もう1人は夕食の支度をしている⁴⁶⁾。これだけ見ると笑いながらテレビを見ている方がこの家の主人で夕食の支度をしているのがメイドだと思うだろうが、実はその逆で、夕食の支度をしているのがオー

46) 米に小石が混じっていると食べたときに噛んで歯が欠けてしまうので、炊く前に米をザルに入れて小石をより分けている。



夕食の支度をするオーキッドの母とテレビを見て笑うメイド



ポケットに手を入れたままタン先生と話をするカーホウ

キッドの母、テレビを見て笑っているのがメイドのヤムである。オーキッドの母は、メイドは奴隷ではないと言ってオーキッドに「メイド」と呼ぶことすら禁じているほどだ。『タレントタイム』でも、メルーの母が食後に娘たちに自分の食器を洗わせるときに同じようなことを言っており、これも「もう1つのマレーシア」が描かれている例である。

もう1つ、『グブラ』の例を紹介しよう。村の礼拝所の管理人であるビラルが家の台所で料理していて、妻が後ろから見守っている。この場面も、料理とは妻が夫のためにするべきであり、妻がいるのに夫に料理させているだけでもひどいのに加え、それを妻が盗み食いするとは許しがたいということで、保守的なマレー人批評家たちの激しい批判に遭った。注意深く見ると、妻のマズは夫が揚げてテーブルに置いたエビせんじに右手を伸ばしている。夫が見ていない隙につまみ食いするのではなく、わざわざ夫が振り返るのを待ってつまみ食いし、夫に追いかけている。それを見た息子はやれやれまた始まったという顔をしており、2人がじゃれあっているのはいつものことのように。これも「もう1つのマレーシア」で、夫が妻のために料理することを考えたことがないという人も、2人の幸せそうな様子を見て、そういうマレーシアがあってもよいかなと思うきっかけになるかもしれない。

『タレントタイム』では、カーホウがポケットに手を入れたままタン先生と話をする場面があり、これは現実のマレーシアでは教師と生徒の関係として許されない部類に入る⁴⁷⁾。

47) 生徒が先生と話をするとき、ポケットに手を入れたままというのはマレーシアではかなり異様な光景で、それを積極的に行う理由も劇中に見当たらないため、なぜこの場面を入れたのかはよくわからない。最も可能性が高い理由として、ヤスミン監督が『牯嶺街(クーリンチェ)少年殺人事件』を意識していたという理由が考えられる。この場面の他にも、『タレントタイム』には『牯嶺街(クーリンチェ)少年殺人事件』の場面を組み替えて別の意味を与えているような場面がいくつもある。これについては機会を改めて検討したい。

「〇〇らしさ」の裏をかく

「もう1つのマレーシア」と関連して、『タレントタイム』には、「〇〇らしさ」の裏をかくとでも言うようなヤスミン監督の遊び心が表れている場面がいくつもある。

マレーシアにはマレー人、華人、インド人の三民族があり、マレー人はイスラム教徒、華人とインド人は非イスラム教徒というのがマレーシア社会の「常識」である。『タレントタイム』ではこの「常識」をからかうような設定が見られる。

マヘシュのおじのガネーシュはインド系のヒンドゥ教徒で、イスラム教徒である恋人と宗教が違うために結ばれなかったが、ガネーシュを演じたムハマド・レズアン・アダムシャーはイスラム教徒である。また、メルーの家のメイドのメイリンは、家族を全員失ってイスラム教に改宗した華人の役だが、メイリンを演じたタン・メイリンは実生活では仏教徒である。そしてアヌアル先生の親友のタン先生は、劇中で宗教は明示されていないがマレーシアの常識から考えるとおそらく仏教徒、そうでないとしたらキリスト教徒で、いずれにしろ非マレー人なのでイスラム教徒ではないと思われるが、タン先生を演じたタン・ユーリョンはイスラム教徒である。この3人は実生活と異なる宗教の信徒を演じており、「マレー人はイスラム教徒、華人とインド人は非イスラム教徒」というマレーシア社会の「常識」を嗤っているかのようである⁴⁸⁾。

また、メルー、マワール、ムラティの三姉妹はイギリス人の祖母を持つマレー人という設定だが、メルー役のパメラ・チョンはイギリス人の母と華人の父を持つのでマレーシアの分類では華人、マワール役のエルザ・

48) マレー人が非イスラム教徒を演じるのでない限り、異教徒の役を演じて問題にはならなかった。ただし後述するように現在(2010年代半ば以降)は検閲の基準が厳格になっており、仮に『タレントタイム』が現在制作されたとしたら検閲を通らなかったかもしれない。



現実と異なる宗教の役を演じる役者(上)と
マレーシアの三民族の役者が演じる三姉妹(下)

イルダリナはマレー人、ムラティ役のアメリア・ヘンダーソンはイギリス人の父とインド人の母を持つためマレーシアの分類ではインド人となり、三姉妹に華人、マレー人、インド人というマレーシアの三民族が揃っている。現実のマレーシアには混血者も多いにもかかわらず、公式にはマレー人、華人、インド人の三民族のいずれかに属さなければならず、どの民族に属するかは一通りに定まるという前提で民族を捉える現在のマレーシアの「常識」の裏をかくてヤスミン監督が嗤っている様子が目に浮かぶ。

多声性を取り戻す

ヤスミン作品の特徴の1つはセリフが多言語であることである。同じ人物が英語、マレー語、中国語のように複数の言語を話すだけでなく、会話の途中で言葉を切り替えていくこともしばしば見られる。これは現実のマレーシアでは珍しいことではないが、マレーシア映画の世界では以前はあまり見られないことだった。

マレーシア映画振興公社(FINAS)は、ハリウッド映画などの外国映画に対してマレーシア国産の映画産業を振興する組織だが、「マレーシア映画」の条件としてセリフが国語(マレー語)であることなどの条件を付けた。マレー語以外のセリフが多く入っていると、たとえそれがマレーシアを舞台にマレーシア人の役者が出演してマレーシア人の監督が撮った映画だとしてもマレーシア映画と見なされない。マレーシア映画には劇場での優先上映が認められたり免税措置が与えられたりするが、マレーシア映画と認められなければハリウッド映画や香港映画との競争になるために劇場での上映が期待できず、上映されても免税措置がないので収益がほとんどないという状況だった。そ

のため、現実のマレーシアは多民族、多言語、多宗教でも、映画の中のマレーシアはどれもマレー人の役者ばかりでセリフはマレー語だけとなっていた。これに対してヤスミン監督はマレー語以外のセリフも積極的に入れることで現実のマレーシアの言語状況を反映させた作品を作った。

この背景には、デジタル技術のために制作費が安くなったことや、国際映画祭に出品できるので国内の劇場で上映して制作資金を回収しなければならないと考えずに済んだという事情もあった。その一方で、ヤスミン監督は自分の作品をマレーシア人の観客に届けるため、国内の劇場で上映できるようにする工夫も重ねてきた。映画振興公社の担当者に対しては正面から交渉しても突破が期待できないため、冗談半分であの手この手を使ったりもした。複数の言語が混ざったセリフが多く1つの文に英語やマレー語の単語が混じることを逆手に取り、英語の単語が若干入っていてもマレー語のセリフとしてカウントしてはどうかと言ってみたり、脚本で手話の部分をマレー語で書くことで見かけ上のマレー語の比率が高くなるようにしたりなど、さまざまな手を使っていた⁴⁹⁾。

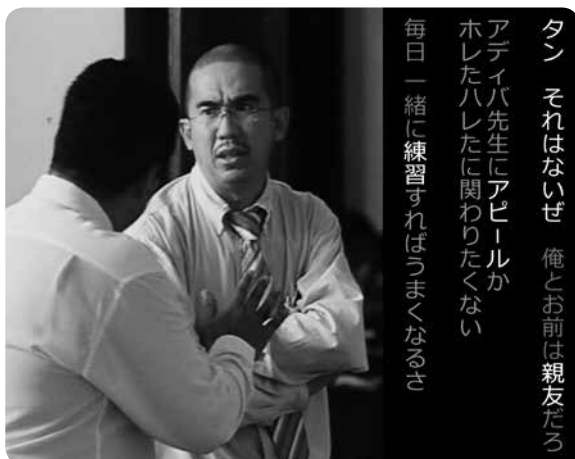
余白で検閲をかわす

マレーシアで制作・公開される映像作品は全てマレーシア映像検閲局の承認を得なければならない。映画振興公社は、映画のみを対象に、基準を満たせば優遇措置を与える半官半民の団体だが、映像検閲局は、全ての映像作品を対象に、基準を満たさなければ公開を認めない強い権限を持った政府の組織である。マレーシアで映像制作に携わっている人たちによれば、2016年前後から特に検閲が厳しくなっている。そのことにまつわる話はたくさんあるが、ここではヤスミン作品と検閲に限定して紹介しよう。

ヤスミン作品では不思議なものごとが完全に説明されないままになることがある。不思議さが物語に余白を与えていると感じる人はヤスミン作品が魅力的に映るだろうし、説明が不十分で物語が完全に理解できないと不満に思う人もいることだろう。

『タレントタイム』でその最たるものは車椅子に乗った

49) 外国語映画は吹き替えでも字幕でも1つの言葉に翻訳されるために多声性が失われてしまう。ヤスミン作品の多声性をスクリーン上で再現する工夫として、ムヴィオラの劇場公開版では英語・マレー語ではないセリフを括弧に入れて表現している。マレーシア映画文化研究会ではヤスミン監督の各作品について、一文中で言葉を切り替えているものを含め、セリフを言語別に色分けする多色字幕版の字幕を作成している。



セリフを言語別に色分けする多色字幕の一例。
一文中の切り替えも含めて色分けで多声性を示す

謎の男の存在だろう。エンドロールではイスマイルという名前が与えられているが、劇中ではその名前で名乗ることも呼ばれることもない。ハフィズの母エンブンが入院している男子禁制の病室に入ってきて、「透明人間だから他の人には見えない」とか「あなたにあわせて病人の姿をしている」とか「いつも歩かないで飛んでばかり」とか、本気だか冗談だかわからないことを話す。そしてハフィズの母にイチゴのようなものを差し出し、映像で登場するのはそれきりになっている。この男の正体は明らかにされないまま、イチゴを渡すことやハフィズの母がそれを口にするにどのような意味があるのかも説明されず、観客の想像に委ねられている。

謎の男が言ったことがどれも本当だとすると、ふだんは人の目に見えず、空を飛んでいて、相手にあわせて姿を変えろというのはおそらく天使なのだろう。エンブンにだけ姿が見えるのはエンブンを天に召すために遣わされたためだろう。「死神」と呼ぶ人もいるようだが、あれはエンブンの前に現れるときの仮の姿であって、見た目で判断すべきではない。イチゴは、それを口することで天に召されるという媒体なのだろう⁵⁰⁾。そう考えると、男のセリフもエンブンがイチゴのへたを持っていたことも説明がつきそうだ。ただし、劇中でそうだとはいきり説明していないため、これらは観客の想像の域を超えることはない。

もしこの男が天使で、そのことが劇中で説明されていたらどうなっていたか。現在のマレーシアの検閲制

度では、神さまや天使が人間の姿をして映像作品に登場することは許されない。この謎の男を演じたジット・ムラドは天使とご縁があるようで、『タレントタイム』とほぼ同じ頃に別のマレーシア人監督が撮った映画にも天使の役で出演している。その作品では劇中で天使だと明言しているために検閲に通っていない。構成上どうしても天使でなければ成り立たない話だそうで、制作者が毎年のように検閲局で交渉しているが、撮影が全て終わって10年近く経つにもかかわらず上映の見通しが立っていない。したがって、もしヤスミン監督や他のスタッフ・キャストがあつた謎の男は天使だと言ったならば、『タレントタイム』はマレーシアで上映が認められなかっただろうし、DVD販売も認められなかっただろう。

マレーシアの検閲制度は、検閲内容はとても厳しいが、画面上で見たり聞いたりしたものしか検閲の対象にしないという決まりを自分に課している。『ムアラフ』で、武術を習っている少女が自分の母親を守るために自分の父親を倒してしまう場面がある。母親が少女の後ろに隠れ、少女が父親に向かって身構えているポーズを取る場面があり、次の場面では少女と母親はほぼそのまま父親だけ地面に倒れている。話の筋を考えれば父親が倒れているのは少女が武術で倒したためだと理解でき、いくら親といえども家庭内で暴力をふるう父親には反逆してよいというメッセージを読み取る人もいることだろう。しかし2つの場面は切り離されており、少女が父親を実際に殴って倒している場面はスクリーンに映っていない。どれほどひどい父親であっても、そして自分の母親を守るためであっても、親は親であり、親を娘が殴り倒すというのはマレーシアではまだまだ認められない。映像を切り分けて中抜きにすることで、物語の筋を理解する人には少女が父親を打倒したと見せつつ、検閲官のように映像に現れるものだけを見る人にはなぜかわからないけれど父親が倒れたと見せるという作りになっている。

『タレントタイム』も同様で、ヤスミン監督は謎の男の正体について一切語らず、劇中に出てこないイスマイルという名前をわざわざ与えている。検閲官のように映像に現れたものだけ見る人に対しては、女子病棟に忍び込んで意味不明のことを話してイチゴをくれて帰っていった変なおじさんがいたという話になっている。観客がそのような受け止めても全く問題ないし、物語の筋を自分なりに解釈してあの男は天使だと受け止めてもかまわないし、どちらも違う解釈をす

50) イチゴを食べると天に召されるという考え方がマレーシアにあるということではない。ヤスミン監督は、天に召されるというのを日常的なものを使って映像で表現するにはどういう手があるかといういろいろ考えて、イチゴを口にするのはどうかと思いついたと話している。

る人がいてもいいというのがヤスミン流だ。

ヤスミン監督や『タレントタイム』に関わった他のスタッフやキャストがあれば天使だと公に言えばマレーシアで上映できなくなるが、私は自分の自由な解釈を表明できる立場にあるので、あの謎の男は天使だと公言している。そして自由な解釈の延長上で考えると、相手の状況に応じて姿を変えろというのなら、メルとマヘシュが木の下のベンチに座っているときに現れた赤ちゃんたちも、謎の男が2人の雰囲気にあわせて姿を変えて現れたのではないかなと考えてみたりする。

さらに想像を逞しくすれば、タレントタイムの決勝に向かう前にハフィズがモスクで礼拝しているときにハフィズのそばにスズメが2羽飛んで来るのも、謎の男とハフィズの母かもしれないと思ったりもする。謎の男はエンブンを天に連れていく役目を負っているが、エンブンが天に召される前にハフィズがこれから1人でやっていけるか少しだけ心配そうにしていたため、天に上る前にハフィズの様子を見せるため、自分とエンブンをスズメの姿にして立ち寄ったのではないだろうか。エンブンがハフィズと最後に交わした2つの約束のうち1つはきちんと礼拝することだった。1羽はハフィズが礼拝している様子を見てさっさと飛び去っていくが、もう1羽はしばらくハフィズのもとに留まり、ハフィズの礼拝を見守るようにしてから飛び去る。

実際にはこの場面はヤスミン監督が意図して撮影したのではなく、礼拝する場面を撮っていたらたまたまスズメが通りかかったのだという。したがって上で書いたことは私の深読みにすぎないが、このような深読みの余地が多くあることもヤスミン作品の魅力である。もしかしたらあの謎の男が姿を変えて映っている場面はほかにもあるかもしれない。

物語を多層に重ねる

ヤスミン監督は意図的に説明不足の部分を作って観客に解釈の余地を与えている。ただし説明不足で話の筋がわからなくなることではなく、映像に映っているものだけで物語を受け止めてもいいし、舞台や登場人物の背景を考えて別の物語を読み取ってもいいし、さらに想像をたくましくして物語を読み取ってもよくて、どの受け止め方や読み取り方をしてもよく、それなりに話の筋が通るような物語の作り方をしている。

タレントタイムの決勝の日、母を亡くして白い服を着たハフィズが舞台に立つ。求められていないのに演奏前に「ベストを尽くすと母と約束しました」と話したのは、母と最後に交わした2つの約束の1つが「タレントタイムでベストを尽くすこと」だったためだ。その言葉は、どこかで見てくれているはずの母に聞かせているとともに、自分にも言い聞かせているのだろう。

ハフィズは決勝に向けて練習していた曲にかえて「I Go」を歌う。演奏中のハフィズに二胡の音が聞こえてくる。予選の演奏中にメルキンが割り込んできたときは足で蹴って追い払ったけれど、このときハフィズは驚いた様子を見せず、ゆっくりと音の方に目を向ける。弾いているのが誰かを知りたかったためではない。そんなことをするのはカーホウしかいないことはよくわかっている。そうではなく、カーホウが自分に寄り添ってくれたことを自分の目で見ておきたかったためだろう。カーホウは何度もハフィズの顔を見ながら演奏するが、ハフィズは一度だけカーホウに目を向けると、後は最後まで前を向いたまま演奏する。

決勝で中国民謡を演奏したカーホウは赤い服を着ていた。中華系のカーホウにとって赤は新年や結婚式のお祝いに着る服の色で、優勝に向けた気合を込めての衣装選びだったのだろう。ハフィズの母が亡くなったことを知ったのはタレントタイム当日であり、他の服に着替えることはできない。ハフィズが喪中の白い服なのに、お祝いの赤い服を着ている自分がその隣にいてもいいのか。ガネーシュが葬式と結婚式を隣りあわせて行ったことがきっかけで命を落としたことが思い浮かぶ。

演奏が終わって2人が向き合うと、ほぼ同時に、しかし一瞬だけカーホウから先に動いて、白い服と赤い服が抱き合う。葬儀と婚礼が一緒になっても諍いになるとは限らないという無言の訴えが聞こえてくるようだ。

物語はここで終わり、疑問が残る。カーホウはハフィズにかなり敵意をむき出しにしていたのに、なぜ最後に和解したのか。ヤスミン監督はその理由を説明していない。

ハフィズにカンニングの疑いがかけられたとき、ハフィズとカーホウは教室で口論している。「お前はお情けで点数を上げてもらえる」とカーホウが皮肉を言い、ハフィズは「実力で勝負したい」と言う。これだけでは2人の間にどんな背景があるのかよくわからないが、マレーシアでは大学進学でプミプトラが優先さ

れることを知っていれば、華人のカーホウがマレー人のハフィズにブミプトラ優先への不満をぶつけているとも理解できる。ブミプトラ優先はマレーシアの国家的政策の最も基本的なもので、それを非ブミプトラの子どもが軽々しく批判する姿は、一部のマレー人たちには看過しがたいことだった。『タレントタイム』が公開されたときにマレーシアの政府系の批評誌に載った批評に、カーホウがブミプトラ優先を批判する口の利き方をしたのは彼の幼さと未熟さを示しており、最後にハフィズに合流したのは自分の愚かさを悔い改めてハフィズに代表されるマレー人に許しを乞うたためだという解説が書かれており、私はそれを読んで腰を抜かすほど驚いた。もちろん、ヤスミン監督はこの解釈も含めて肯定も否定もしないという態度を通した。

これと異なる説明としてメルーへの気持ちと結びつける解釈がある。タレントタイムの決勝当日、会場に椅子を運ぶ途中でメルキンがカーホウに声をかけ、カーホウが二胡で弾いている曲の題は『茉莉花』で、「茉莉花」はマレー語だと「メルー」なのでメルーに気があるのではないかと尋ねる。カーホウは肯定も否定もせず、「誰にも言うなよ」とメルキンを睨む。このやりとりから、カーホウも密かにメルーのことが好きだったけれどマヘシュに取られて失恋したとする解釈が出てくる。ヤスミン監督はこの解釈を肯定も否定もしないだろうが、私はこの解釈の説得力にやや疑問を抱いている。

タレントタイムの会場はアディバ先生が勤めるアンダーソン高校だが、参加資格は近隣の学校にも開かれている。ハフィズやカーホウやマヘシュはアンダーソン高校に通う高校生だが、メルーは大学進学課程の生徒なので学校が異なる。アディバ先生はメルーのことを知らなかったし、アヌアル先生とタン先生もこのタレントタイムでメルーと初めて対面している。ハフィズもマヘシュもメルーとは今回が初対面だ。カーホウよりずっと社交的に見えるしメルーと民族が同じ（つまりよく行く店が重なる可能性が高い）ハフィズですらメルーのことを知らなかったのに、なぜカーホウがメルーのことを知っていて、しかもメルーに懸想して「茉莉花」という曲を選べたというのだろうか。

また、仮にカーホウがメルーに秘めた想いを寄せていたとしても、カーホウとハフィズの和解はそれでは説明がつかない。同じ女性に振られた男どうしの連帯だなんていう話ではないはずだ。

カーホウがハフィズへの態度を変えたのはタレントタイムの当日だった。そのときのメルキンとのやり取りでは、「メルーのことが好きなのか」と尋ねられ、ハフィズの母が亡くなったと知らされた。メルーのことを言われたときには肯定も否定もせず「誰にも言うなよ」と言うだけで表情も変えていないが、ハフィズの母が亡くなったと聞くとその場に立ち尽くし、何かを考えているような表情になる。

カーホウの母はどこにいるのだろうか。劇中にはまったく登場しない。想像を膨らませると、もしかしたらカーホウには母がいないのではないだろうか。それならばカーホウがハフィズに激しいライバル意識を燃やしていることも合点がいく。ハフィズは病気の母の看病をしながらしっかり勉強もするのでみんなから気にかけてもらっているし立派だと言われているが、たとえ病院でしか会えないとしてもハフィズは母に毎日会うことができる。しかし世の中にはどんなに母に会いたくてももう会えない人もいる。

母への思いゆえの嫉妬心だとしたら、ハフィズが母を失ったと聞くことでその嫉妬心が消えて、気持ちはその反対に向かうだろう。母を亡くしたハフィズの気持ちがわかるのは母を失う経験をした人だけだからだ。

「茉莉花」はもしかしたらカーホウの母に由来する名前だったのではないだろうか。メルキンに「気があるのか」と言われて「誰にも言うなよ」と言ったのは、本当に大切にしていることは他人に触れられたくないという気持ちが働いて、親友のメルキンにも隠しておきたかったからではないだろうか。

これも根拠がない私の解釈なので、これと違う解釈をする人もいることだろう⁵¹⁾。肝心なのは、観る人の立場や関心や気分によって解釈が異なり、そのどの解釈も成り立つという意味で物語が多層的になっていることだ。今は特定の解釈がしっくりくると思う人も、何年か経って『タレントタイム』を観たときにはまた別の解釈の方がよいと思うようになるかもしれない。

つながりを埋め込む

ヤスミン監督は遊び心でいっぱいの人で、作品にもいろいろな仕掛けを入れている。それに気がつかなくても物語の理解に少しも妨げにならないけれど気づ

51)『タレントタイム』の中に根拠は見つけられていないが、『ムアラフ』には、自分の母に冷たい態度をとるブライアンに対して、母を亡くしているアニは「お母さんに会いたくても会えない人もいるのよ」と言い、実家の母に会ってくるように伝える場面がある。



結婚の儀礼を想起させるヒンドゥ寺院の喇叭と太鼓
そしてヒンドゥの女神



ヒンドゥの女神のように見せて実はマネキン

くと裏の物語が表れてくるような仕掛けを1つ紹介しよう。

マヘシュのおじのガネーシュは、かつて結婚したいと思った恋人がいたけれど、彼女がイスラム教徒だからという理由で家族の反対に遭い、添い遂げることができなかった。ガネーシュは彼女がいつか自分のもとに戻ってきてくれるのではないかと淡い期待を抱いてずっと独身ですごしていたけれど、彼女もずっと独身のまま安アパートに暮らしていて、最近になって亡くなったと知った。安アパートに暮らしていたというのは、いつなんどき好きな人と一緒に暮らすことになっても大丈夫なようにとずっと思っていたということだ。それなのに、彼女が一人で暮らしていたことも亡くなったことも知らなかったし、宗教が違うために彼女を弔えないままになっている。だから、もし死んだ後の世界で彼女と再び出会うことができるならば、そこでは宗教が違うという理由で2人の間を妨げるものがなく彼女と結ばれたいと願い、そのことを書いたメールをマヘシュに送った⁵²⁾。

結婚式に向けて生地選びをしていたガネーシュの婚約者が、心ここにあらずのガネーシュの顔にいたずら半分で白い布をかぶせる。ガネーシュの葬儀でマヘシュがそうだったように、白い布が頭にかぶせられるのは葬儀が一区切りついたことを意味する。告白のメールが読まれたタイミングで頭に白い布をかぶせられることで、ガネーシュはかつての恋人を彼なりの方法で弔ったということなのだろう。

ガネーシュが亡くなった夜、ガネーシュたちが結婚式を行っているマヘシュの家に向かうパトカーのサ

イレンがマヘシュのオートバイを追い抜いていく。この場面に挿入されるヒンドゥ寺院の喇叭と太鼓はヒンドゥ教の結婚の儀礼を想起させる。結婚の成立を示す太鼓のドーンという音で場面が切り替わり、ガネーシュが命を落としたことが知らされる。死と結婚を同時に迎えたガネーシュは願い通りかつての恋人と結ばれたのだろうか。

喇叭と太鼓の場面でヒンドゥ寺院にある神々の像も映され、演奏がクライマックスになると女神像がアップになる。表情は神秘的で何を思っているかはつきりせず、ガネーシュの結婚を見守っているかのようでもあり、ガネーシュを冷ややかに見ているようでもある。

ヒンドゥ寺院の場面で他の神々の像と交互で映されるため、これもヒンドゥ寺院の女神像だろうと思うが、劇中でこれより後(物語内の時間ではこれより前)、ガネーシュが婚約者と生地屋に行き、亡くなった元恋人のことを考えて心ここにあらずになっている場面で、生地屋にマネキン人形が何体か置かれており、先の女神像はそのマネキン人形だったことがわかる。

ヒンドゥ寺院の女神のように見せておいて実はマネキン人形だったというのはいかにもヤスミン監督らしいが、深読みを逞しくするならば、これはガネーシュの元恋人のこの世での仮の姿なのかもしれない。そう思ってガネーシュの「結婚」の成立を告げる太鼓の直前に映る彼女の表情を見てみると、ずっと待っていた愛する人とようやく結ばれるといういろいろな感情が混じりあった表情にも感じられる。

むすび

『タレントタイム』を中心に、才能と物語の2つの側面からヤスミン・ワールドの作られ方を紹介した。出演者の個性と才能を十分に引き出す環境を整えて、制作

52) 現在のマレーシアの「常識」に従えば、宗教が違えば死後に行く世界も違うため、ガネーシュと元恋人はこのままでは死後も同じ世界に行けないことになる。ヤスミン監督も当然そのことをよくわかった上で、全知全能の存在が宗教の違いを気にして2人を分けたりしないことを願うとガネーシュに言わせている。

や公開に関わるさまざまな制約を意識して表現する工夫によって、何層も織り込まれて余白の多い物語が生まれる様子的一端が紹介できたことを願っている。このノートでは触れられなかったが『タレントタイム』は音楽の魅力も欠かすことができず、ほかにもいろいろな角度から『タレントタイム』の魅力が語られていくことを願っている。

むすびにかえて、ヤスミン監督の短編作品を3つ紹介しよう。

出会った人の物語に耳を傾け、それをうまく引き出し、意識して演じることなく演じさせるような環境を整え、それによって心を打つ物語を作ってきた例に、テレビ広告の『恋するタン・ホンミン』⁵³⁾がある。カンヌ国際広告祭に出品しようとしたヤスミン監督はある小学校で撮影を行い、予定していた作品を撮り終えて帰ろうとしたところ、ヤスミン監督にまわりついて離れない男の子がいた。特に何かを訴えたいということではなかったが、話を聞いているうちに好きな女の子の話になり、ちょうどその子が現場にいるというので、カメラをまわしてその話をしてもらい、それを『恋するタン・ホンミン』にまとめた。かわいらしい作品に仕上がったのでカンヌ国際広告祭に出品したところ金賞に輝き、ヤスミン監督を世界的に有名にした⁵⁴⁾。

ヤスミン監督は、あるとき自分が死んだ後の話をし、「私の名前は忘れてもいい、でも私が作った物語は忘れないでほしい」と語った。しかしヤスミン監督のこの願いは半分しか満たされなかった。後半の「私が作った物語は忘れないでほしい」は満たされたが、それらの作品はいずれもヤスミン監督の物語として語り継がれており、前半の「私の名前は忘れてもいい」は満たされなかったためだ。ヤスミン監督の長編作品は6作だが、その後さまざまな人に形を変えて継承されている。マレーシアやシンガポールの舞台では、『タレントタイム』に着想を得た「Parah」や『ムアラフ』に着想を得た「Nadirah」などの作品が作られている。これらの舞台をプロデュースしたジョー・クカサスは、ヤスミン監督がシンガポール政府の依頼で制作したテレビ広告の『葬儀』(あるいは『愛おしい欠点』)⁵⁵⁾に出演している。

ヤスミン監督の最後の短編作品となった『チョコレート』⁵⁶⁾は、マレーシアの15人の映画人による短編

集「15Malasia」の1編として2009年9月16日に公開された。『タレントタイム』のカーホウ役のホン・カーホウが雑貨屋の華人少年役、『細い目』などのオーキッド役のシャリファ・アマニがマレー人の女子高生役で出演し、『タレントタイム』や『細い目』でメイリン役のタン・メイリンが華人少年の母親役として声だけだが出演している。カーホウとシャリファ・アマニがどのような関係で、2人のやり取りにどのような意味が込められているのか、余白が大きく受け手に解釈が委ねられているヤスミン監督らしい作品である⁵⁷⁾。



53) Tan Hong Ming in Love(<http://goo.gl/RkgRCw>)。

54) もともと出品予定だった広告も銅賞に輝いた。

55) Funeralまたは(<http://goo.gl/HEjhjr>)。

56) Chocolate(<http://goo.gl/vKV3gv>)。

57)「チョコレート」についてはブックレット③所収の「『チョコレート』に見る甘くて苦い決意」を参照。